

児童の「書くこと」に関する実態調査

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-03-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 兼重, 昇, 藤井, 浩美, 瀧本, 耕平, 梅本, 龍多, 小笠原, 剛士 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4457

児童の「書くこと」に関する実態調査

大阪樟蔭女子大学児童教育学部教授 兼重 昇
阿南工業高等専門学校准教授 藤井浩美
東広島市立東西条小学校教諭 瀧本耕平
関西大学初等部教諭 梅本龍多
旺文社デジタル事業部 小笠原剛士

1. はじめに：調査の背景と目的

小学校における外国語教育は、実際は明治期に遡ることもできるが（江利川 1996 など）、戦後になり公教育においては英語教育は中学校から始められるとされていた。昭和 61 年 4 月、当時の臨時教育審議会「教育改革に関する第二次答申」において、初めて英語教育の開始時期について検討を進めることが文言として示され、これを受けて、平成 4 年、文部科学省研究開発校として大阪市立真田山小学校・同味原小学校において、「国際理解教育の一環としての英語教育」の研究が行われるようになった。その後、20 年以上の時間を経て、平成 23 年度にようやく 5、6 年生を対象に「外国語活動」として、外国語教育がすべての子どもたちに行われることとなった（兼重、直山 2008）。そして、2020 年度、3、4 年生には、「外国語活動」、5、6 年生には「外国語（教科）」が導入されることになる。

この間、様々な実践校において、文部科学省等の指導を受けながら、多くの試行錯誤が行われてきた。音声中心での活動を行うために、極端な「文字指導をしないこと」が求められた時期もあり、一方で指導内容・方法の流動性のなかで、フォニックス指導などの、音と文字の指導を積極的に取り組もうとしてきた学校もある。こうした状況で、文部科学省からは、教育内容・指導方法の統一をはかるために、『英語ノート』『Hi, friends』『Let's Try!』『We Can!』などの（補助）教材や、それに付随したデジタル教材、ワークシートなども多く提供されてきた。しかし、実際には、教育内容・指導方法などについては、ばらつきがみられ、また文部科学省が提供した教材・教具においても、異なった理論背景を元に作成されたものが提供されるなど、学校現場、児童が混乱しているという教員・児童の意見も多く聞かれた。特に、「文字」

に関する指導は混乱が顕著であった。また、小中連携を模索する中で、キーワードの一つとして「文字」に関する指導を挙げている地域も多くみられた(兼重 2019)。

こうした状況を鑑み、新学習指導要領下では、5, 6年生の教科としての外国語では明示的な文字指導が導入されることになった。これをうけて、移行期に先行的に取り組んでいる学校では文字指導を試行し、その評価も試みようとしている。

本調査は、先行して『We Can!』などを利用しながら外国語の授業を受けてきた公立学校の児童が、学習指導要領で示された目標にどれくらい到達しているのかを調査し、そこにあらわれる課題を探ることで、英語学習導入期である小学校での文字指導において考察すると同時に、中等教育や高等教育におけるリメディアル教育のあり方への示唆を得ることも目指す。

2 『小学校学習指導要領』の目指す「書くこと」とそれに基づいた評価テストの作成

文部科学省(2017)では、5, 6年生の外国語における「書くことの目標を次のように示し、解説を加えている。

ア 大文字、小文字を活字体で書くことができるようにする。また語順を意識しながら音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を書き写すことができるようにする。

イ 児童のことや身近で簡単な事柄について、例文を参考に、音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を用いて書くことができるようにする。(文部科学省 2017 : 81-82)

これを著者らは、(A)「なにを」(B)「どのような条件で」(C)「どのように」(D)「書く」or「書き写す」と分類し、イをそれぞれ次のように解釈した。

ア

① (A) 大文字、小文字の活字体を (B) 音声などの手がかりがなくても (C) (D) 書くことができること

② (B) 語順を意識して、(A) 慣れ親しんだ語句などを (C)(D) 書き写すこ

とができること、

イ

③ (A) 児童のことや身近で簡単な事柄について、(B) 例文を参考に、(C) 音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を用いて (D) 書くことができるようにする

また、これを具体的な評価テストへ具現化するために、次のようなタスクを設定した（具体的なテストについては、Appendix に示す）。

①-1

「覚えているアルファベットを書く活動（大文字，小文字）」

①-2（学習指導要領「聞くこと」との関係から）

「聞こえたアルファベットを書く活動（大文字，小文字）」

※扱った文字：大文字 OSRNPZJQLY 小文字 ckmaldivyq

②バラバラに並べられた語句を正しい語順で書き写す活動

③例文を参考に、自分のことについて書く活動

※表現したい語の綴りは覚えることは求められていないため We Can! にあるワードリストを参考にしても良いこととした。

また、本調査においては、現在文部科学省から提供されているワークシートの補助線（4線）の間隔が5:9:5（Appendix に示した具体的なテストのアの補助線）であり、これまで一般に使われてきた5:5:5（具体的なテストのイの補助線）とう等間隔のものとの違いについて、児童の実態を調査するために、両者について児童の好みを尋ねる項目を加えて、評価テストを作成した。

3 調査

本調査の協力者は、文部科学省指定の平成26-29年度英語（外国語）教育強化地域拠点事業を受けた小学校における第6学年2クラス（56名）であり、学習経験の概要は、次の通りである。1～4年生時は、年間35時間の外国語活動（『Hi, friends!』および自作教材）を利用し、文字学習については、3年生の国語におけるローマ字および『Hi, friends!』で示されているアルファベットの文字認識程度の活動のみである。5，6年生時では、文部科学省指

定事業終了したものの『We Can!』に基づいた学習を先行的に（年間 70 時間）継続して行い、ワークシートは文部科学省が提供するもの（5 年生より補助線の間隔は、5:9:5 を利用）を中心に利用して学習している。

調査は、2019(平成 31 年)年 7 月の第 1 週に実施し、扱った表現については、1 学期の学習を踏まえてのものである。実施時間は年間 70 時間の授業時間のうち 1 時間分を活用して行った。

分析については、各問いの正答率および解答・回答の傾向を調査したものを示す。

4 結果及び考察

本節では、調査結果をタスクごとにまとめて示し、解釈及び考察を行った。

表 1 は、覚えているアルファベットを想起し補助線にのせて書く活動の結果を示したものである。

【覚えているアルファベットを書く活動】

表 1 覚えているアルファベットの大きい文字・小さい文字の正答数 (n=56)

	Average	SD
大文字 (max=26)	23.7	3.93
小文字 (max=26)	19.6	6.61

大文字については、比較的想起し書くことができているが、全アルファベット 26 字のうち抜けやすいのは、W, U, V などである。小文字は、f, p, q, v, w が書かれていない傾向が多い。ただし、本タスクでは、覚えているもの想起させて書かせる活動であったために、記憶自体が困難であったことも予想される。回答の中には、数個のアルファベットを塊として書いてあるものがあり、その塊はアルファベットの歌の切れ目と共通性がみられたため、歌を使ってアルファベットを記憶していたことが想像できる。

想起できるアルファベットの誤答の傾向としては、大文字については、鏡文字“J”(10 件)“N”(2 件)“Z”(1 件)や、“j”小文字を大きく書くなどがみられた。小文字については、大文字を小さく書く傾向が多く見られた。

大文字 J		大文字 D	大文字 Z	大文字 N	
					

図1 鏡文字の例

この結果から、アルファベットの指導においては、26文字を同じ扱いとするのではなく、文字ごとに指導の工夫をする必要性が示唆される。

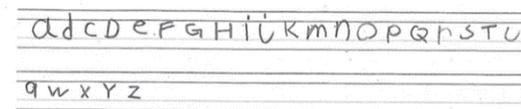
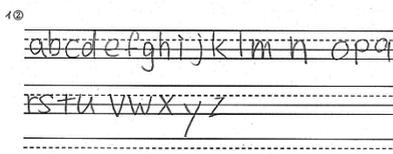
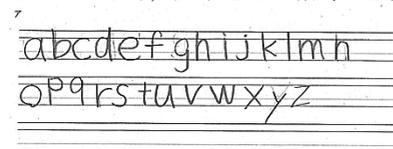


図2 児童のハンドライティングの例（小文字）

図2は、児童のハンドライティングの例である。これらは、補助線のタイプによってその使い方の混乱が起きていること、h, nの判別の難しさもおこりやすいこと、前述の大文字を小さく書くことで小文字としている例などを示している。

表2 補助線の好み (n=56)

	5:9:5	5:5:5	無回答
小文字	30	24	2
大文字	36	14	6

表2は、補助線の好みについて、大文字と小文字に分けて、たずねたものの結果である。この結果から、大文字では、好みは約半々に分かれるが、小文字は5:9:5を好む傾向があることがわかる。しかし、これについては十分な検討が必要である。3節で示したように、本調査の協力者は、4年生までは5:5:5の補助線での文字学習をしてきた経験があり、現在は5:9:5の補助線での学習を行なっている。両方を経験した上で、好みが分かれていることに注目しておく必要がある。また、本調査で、5:5:5の補助線は、Appendixで示した補助線より、それぞれの間隔が狭かったという大きな課題があった。実際は、5:9:5の補助線の方が全体的に大きく書きやすかったということもありうる解釈である。いずれにしても、丁寧な教材教具の精選が必要であることがわかる。

【聞こえたアルファベットを書く活動】

表3は、名前を聞いたアルファベットの`大文字・小文字`の正答数を示したものである。

表3 名前を聞いたアルファベットの`大文字・小文字`の正答数 (n=56)

	Average	SD
大文字 (max=10)	8.93	1.39
小文字 (max=10)	6.24	2.55

※大文字：OSRNPZJQLY 小文字：ckmaldgvyq

大文字は、比較的天井効果がみられるが、これは小文字そのものを書くことが難しく、思い出して書く活動と同様に大文字を小さく書いて表現しようとした誤答があるためである。また、N, Jなどは、鏡文字が散見されることも同傾向である。誤答の例として、大きく音声的要因(G-Z, I-R, L-O, N-L, M-L, A-N, G-J)と、形態的要因(V-Y)が起こっていることが予想され、この傾向は小文字においても同様であった(m-n, b-d, d-v, w-y, h-l, e-d, p-b, p-g)。

【正しい語順で書き写す活動】

表 4-7 はバラバラに並べられた語句を正しい語順で書き写す活動の結果である。表 5-7 は、それぞれの課題の誤答例を図 3 実際のハンドライティングの例を示したものである。これらを見ると、比較的正答率は高いことがわかるが、“I can swim fast.” の例では、特に日本語の語順の影響を強く受けた誤答もみられる。日本語や外国語との比較から語順への意識が必要であることがわかる。また図 3 に見られるように、「単語」のまとまりへの意識が薄い傾向がある児童もみられた。「単語（塊）への意識」「丁寧に書くこと」への意識高揚が必要であることがわかる。一方で、本調査での「補助線の幅（横幅）のあり方」についても検討が必要であることがわかった。児童の例を概観すると、横幅が短いと文字間、単語の間が詰まり、長いと間延びしてしまう傾向がある。これは、テスト作成時やワークシートの作成の際に、我々が十分留意すべき点であると考えられる。

表 4 正しい語順で書き写す活動 (n=56)

	正答数	誤答数
“I play the piano.”	49(87.5%)	7(12.5%)
“What animals do you like?”	47(83.9%)	9(16.1%)
“I can swim fast.”	28(50%)	28(50%)

表 5 正しい語順で書き写す活動の誤答例：“I play the piano.”

誤答例	No. (人)
I play the pano.	2
I pray the piano.	1
I the piano play.	4

表 6 正しい語順で書き写す活動の誤答例：“What animals do you like?”

誤答例	No. (人)
do you like What animals	2

I like wnatanimals you do.	1
what animal s do you do	1
like aoyouwhat animals	1
do wnatanimals you	1
you like do What animals.	1
like you do what animals.	1
What animals you like do	1

表7 正しい語順で書き写す活動の誤答例：“I can swim fast.”

誤答例	No. (人)
I can fast swim.	19
I fast can swim.	7
I fast swim.	1
I facanswim.	1
Can I swim fast.	1

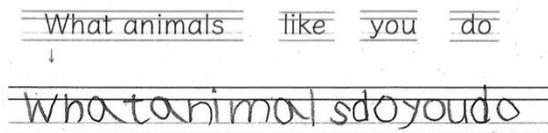


図3 正しい語順で書き写す活動の児童のハンドライティング例

【例文を参考に、自分のことについて書く活動】

本タスクの結果については、紙面の都合上、誤答の特徴についてのみ示すことにとどめる。

① “play” の欠落

例) I can volleyball. I can dodgeball. など多数

② “play” の過剰使用

例) I can play dancing. I can play origami.

③単数・複数の問題

例) I want glove. I want hat. など

④本当に言いたいことを表現することでの誤り

例) I can draw pictere. I can cauculate.

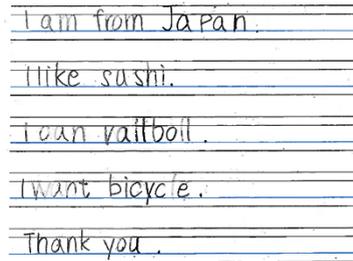


図4 例文を参考に、自分のことについて書く活動の作品例

本タスクは、例文を参考に自分のことについて、書き写すことを求めたものであるが、「自分のことを表現する」という目的を忠実に実現しようとして起こった誤りであると解釈できる。小学校段階では、文法的な正確さや綴りについては、指導をあまりされておらず、むしろ本調査協力者の学校では、本当に自分の言いたいことを表現することが求められている。そこで見られたエラーが上のようなものでありこれは大きく二つに分類される。①～③については、いわゆる文法的なエラーであり、④については、綴りの間違いである。児童の解答・ライティングでは、程度の違いはあるものの、全く内容が伝わらないほどのグローバルエラーはあまり見られなかった。図4などもその例である。

ここで課題となってくるのが、これをどのように評価して行くのかである。I like の単語の間が空いていない、play volleyball と正しくかけていない (play の欠落、綴り間違い)、a bicycle になっていない (冠詞が抜けている) など、課題はたくさんあるかもしれない。しかし、伝えたいことをどうにか伝えているという点では、タスクアチーブメントは満たしているといえるという解釈もある。この評価の基準・規準のあり方については、次節以降において議

論をする。

5 調査のまとめと提案

本調査は、教科としての外国語の授業を先行して受けてきた公立学校の児童が、学習指導要領で示された書くことの目標をどれくらい達成しているのかを調査し、指導への示唆を得ることを目的とした。結果として、次のようなことが明らかになった。

【アルファベット文字を書く活動】

- ・アルファベットの大文字は比較的書くことができるが、小文字の指導は必要である。
- ・大文字・小文字両方について、鏡文字への対応が必要な文字に特徴があり、J, N, b, d, などは、特にきめ細やかな指導が必要である。
- ・音声的・形態的に近いアルファベットの指導について、丁寧な指導が必要である。

これらを実現するためには、単に何度も書く指導ではなく、声に出しながら書く、体などを使いながら形態を意識させる活動を取り入れるなどの工夫が必要である。

【正しい語順で書き写す活動】

- ・課題 1, 2 については、80%以上の正答率を示しており、目標を達成できているといえるが、副詞などを含む場合については、日本語の語順に影響をされている。

副詞の位置は、日本語と英語では異なる場合が多いため、“run fast”を一つの塊として扱い指導をするか、視覚的に日本語・英語を比較しながら違いについて気づかせながら指導するなどの工夫が必要である。また、小学校段階でも頻度を表す副詞も扱うため、事前に教材の配列などを確認しておくことが求められる。

【例文を参考に、自分のことについて書く活動】

- ・自分のことを表現しようという態度はみられる。

- ・自分のことを表現しようという傾向が強くと、ワードリストなどを参考にする前に、自分で書こうとする傾向があり、綴りの間違いや、文法的なエラーが頻出する。
- ・下線部を入れかえる際の、下線部の設定の仕方によって、”play”の欠落や過剰利用、単数・複数などの選択などに課題がでてくる。

このタスクにおける評価及び指導については、まず担当者による「目標」の共有が不可欠となる。目指す姿としての目標を共有し、それに基づいた「評価規準」を作成し、加えて実際の児童の作品・パフォーマンスをもとに、「評価基準」の作成、共有をする必要がある。中等教育・高等教育も見通した、流暢さと正確さのバランスを考えた体系的な指導マップを作成した上で、学習初期段階では過度に文法や綴りの正確さのみに偏らない規準・基準の構築が大切である。

以上の3つのタスク全体に通じることであるが、「丁寧に書く」ことへの意識づけとして、コミュニケーション場面を設定した「読み手」への意識を持たせた指導やタスクの設定をすることが肝要である。評価されるために書くのではなく、読んでもらうために書くことを授業での学習活動や評価タスクにも取り入れて行くと良いであろう。個々のアルファベット文字を書く際には活用が難しいかもしれないが、この目的・場面・状況の設定は同時に、新しい学習指導要領で求められる「思考・判断・表現力」の伸長へもつながっていくことが期待される。例えば、本調査でのタスクを次のように改訂するなど参考になるであろう。

<オリジナルの指示文>

Aliceの自己紹介を参考に、下線部を入れ替えて自分の自己紹介をしてみましょう。

<改訂例>

インターネットで、海外の人たちと交流会をしています。Aliceの自己紹介を受けて、下線部を入れ替えるなどして、参加者に自己紹介をしましょう。

6 最後に

本調査は、小学生を対象に行ったものであるが、ここで得られた知見は、

中等教育や高等教育における英語が苦手な学習者への対応としても活用できることがいくつかある。個々の文字の書き方や文として書く際の読みやすさへの指導、語順への意識の向けさせ方など、学習者の実態を把握するとともに、その実態にあった指導をしていくことが、丁寧な指導へとつながっていく。また、全体を通しての提案としてあげたように、書く活動においても、目的・場面・状況を設定したタスクを意識することで、丁寧に書くことや、思考力を発揮させるよう促すことができることなどは、あらゆる学習段階にも共通することであろう。長期的な視点に基づいて、丁寧に、きめ細やかな指導を体系的に進めることで、意味のある学習を保障したいものである。

参考文献

- 江利川春雄(1996)「小学校における英語科教育の歴史(5)-全体像の把握をめざして」『日本英語教育史研究』第11号
- 兼重昇, 直山木綿子(編著)(2008)『小学校新学習指導要領の展開 外国語活動編』明治図書
- 兼重昇(監修)(2019)『みんなが輝く小学校英語 岡山市立石井小学校「イマージョン教育」の取り組み』啓林館
- 文部科学省(2017)『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 外国語活動・外国語編』

Appendix 評価テスト (縮小版)

英語力試しクイズ

【名前】 6年 () 組 () 番

1. アルファベットを書いてみよう！

(1) 覚えているアルファベットの大文字を書こう。

(※アとイのどちらのシートを使っても良いです)

ア

イ

(2) アとイは、どちらが書きやすかったですか。(○をつけてください。)

(ア イ)

(3) 覚えているアルファベットの小文字を書こう。

(※アとイのどちらのシートを使っても良いです)

ア

イ

アとイは、どちらが書きやすかったですか。(○をつけてください。)

(ア イ)

(4) 先生が言ったアルファベットの大文字を書こう！

(5) 先生が言ったアルファベットの小文字を書こう！

次の英語を正しく並べ替えて写してみよう！

(例) 私は犬が好きです。

dogs like I

↓

I like dogs.

(1) 私はピアノをひきます。

I the piano play

(2) どんな動物が好きですか？

What animals like you do

(3) 私は、早く泳ぐことができます。

I fast swim can

Alice の自己紹介を参考に、下線を入れ替えて自分の自己紹介をしてみましょう。

We can! の WORD LIST(84 ページから 96 ページ) を参考にしよう。

Hi, I am Alice.	(名前)
I am from Italy.	(出身)
I like sushi.	(好きな食べ物など)
I can play soccer.	(できること)
I want a soccer ball.	(ほしいもの)
Thank you.	

Blank writing lines for practice.

